

災害支援ボランティアの振り返りのあり方に関する研究

市川 享子

1 研究の背景と目的

自然災害後に甚大な被害に見舞われた地域にボランティアが駆けつける状況が広がっている。特に阪神淡路大震災が発生した1995年は「ボランティア元年」と言われ、災害復興におけるボランティアの役割が広く認知され、ボランティアによる地域への関与は日本社会に定着していると言える。また国際的な災害の頻発により、人道支援活動を進める支援者を対象にした指針や配慮に関するガイドラインの作成が複数の機関によって進められている。そのなかでも包括的な指針を示したものが「スフィアハンドブック¹」である。災害援助における行動の質を向上し、説明責任を果たすために人道憲章、権利保護の原則、支援時のコア基準、4分野の技術的基準が示されている。さらに「人道支援の質と説明責任に関する基準」(CHS²)においても、人道原則による支援の理念及びそれを実現するため基準が示され、ニーズにあった支援、負の影響を受けることがなくレジリエンスを得てより安全な状況に置かれる、決定への参加等が提示された。指針作成の背景には支援をおこなう側の反省を受け、支援の質を向上させようという国際NGOの意識と行動の高まりがあった。災害後におこなわれる支援の多くは、被害を受けたコミュニティの外部から入る。ときには支援する側がコミュニティにおける事柄を決めていたことがあり、一方的な支援が人々の権利を守ることに繋がらず、更なる被害を生じさせてしまうという経験と反省があった。それらを教訓にして、「人道性」「公平性」「中立性」「独立性」が担保された人道支援の基準について、複数の機関がそれぞれの蓄積を出し合いながらこれらの理念や基準が構築されてきた。

日本における災害支援現場に目を向けると、ピースボート災害支援センター(2017)や全国社会福祉協議会(2019, 2021)がガイドブックを作成しているが、ボランティアの参加方法や活動者の安全確保の提示に留まり、倫理や行動指針に関する提示や蓄積となっているとはいいづらい。全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOARD)のホームページにおいては「スフィアハンドブック」を紹介しているが、人道的観点から支援倫理を継続的に振り返り、実践知として蓄積・深化させていく営みは限られている。災害ボランティアの活動層が広がることにより、はじめて参加するボランティアが災害ボランティアであるという例も少なくない。市民の力が社会で発揮されることは大変重要である。しかし、被災した地域で住民に直接関わる活動も多いため、外部者が地域に関わる影響について、ボランティア活動に携わる人々がこれらの影響を自覚し、体系性をもつてくり返

し振り返っていくことが重要であり、これにより、公正で、自律的、中立的、人道的な支援に近づいていく。

本研究では災害ボランティアの活動者が振り返りを通して、地域に関わる意味や影響について考察し、実践をよりよく変化させていくあり方（内容や方法）について考える。方法として、日本で取り組まれてきた振り返りに関する教材を分析していく。これらの研究成果をもとに、災害支援の活動者やそれを支援する機関やスタッフがどのように振り返りを支援できるか、その可能性も考察していく。

2. 被災した地域の人々を中心として支援のための振り返りとは

災害後、被災した住民は複雑な状況に置かれる。同じ地域内でも被災状況によって直面する課題は異なる。2004年の新潟県中越地震では地震による家屋の倒壊に加え、数か月後には19年ぶりの豪雪による影響など、複合的な被害に見舞われた。東日本大震災をはじめとした複数の災害ではしばしば仮設住宅で生活する住民と自宅で生活を続ける住民の間には見えづらい分断が生じていた。また福島第一原発事故発生後の生活再建の選択にも象徴されるように、どのように生活を立て直すかは本来住民一人の意思決定に委ねられるべきであるが、外部者が地域に関わることで少なからず外部者の影響が生まれることもある。東日本大震災で被災した地域における、中心と周辺に分断について考察した関(2016)は「復興における単純な中心一周辺構造はない」と述べる。「その様相は複雑化しているのであり、復興においては誰／どこが中心で、誰／どこが周辺に追いやられているかは立場、場面、状況によって異なっている。つまり問題が起因する構造が潜在化してしまい、望ましい復興の状況を見出すことが難しい」とされている。平時の関係が崩れ、目に見えづらい複雑な状況があるなか、中立的で公平で独立した支援をしていくには、熟慮を繰り返していくことになる。

実践における省察についての研究を進めたD. Schön (1983=2007)は複雑・不確実な実践現場において、実践家はどのように行為の中でリフレクションをするのか(How practitioners think in Action)という問いから振り返りの構造を分析した。リフレクティブな実践として、行動しながら思考を再構築するReflection-in-Action(行為に中のリフレクション)と行動の真っただ中で立ち止まったり、リフレクションするReflection-on-Action(行為についてのリフレクション)、その両者が熟練において重要であると述べている。つまり、PDCAサイクルのように既定の目標に対して到達したかどうかというような判定のための振り返りでなく、自己の内省に軸を置き、ときには立ち止まり省察することで、新たな視点で見つめ直せるのである。河井(2016)はD. Schönのリフレクション論により「行為と思考が並存しうる道が開かれたと述べる。たとえば、ある子どもが遊びの過程でなにげなくした発言を行為の中で捉え(reflection in Action)、それについて事後に静かにリフレクションする(reflection on Action)ことで、考察をもとに実践を展望したり、変化させていくことが可能となる。さらに、リフレクションの対象は、思考や知識といった認知的なものに限定されない。感情的な動揺や混乱がリフレクション・プロセスの契機となることも複数の研究者から指摘されている(河井2008, Boud et al. 1993; Mezirow 1991=2012)。

リフレクションが活動前、活動中、活動後を循環しながら深まることを指摘したのが、Toole, J. & Toole, P. (1995) である。「活動前のリフレクションでは、学習者の固定概念やこれからおこなわれる活動を批判的、根源的に振り返るとともに活動者の参加する活動を多義的に捉えることも目指す。活動中の観察においては文脈に合わせて活動の意味を分析したり、活動によって得た気づきを深め、新たな課題を発見する。最終段階である新たな応用では、実践全体を俯瞰的に捉え、新たな課題を発見していく」(Toole, J. & Toole, P. 1995, 久保園 2015)。リフレクションの深まりは行為の最中や後にのみ生成されるのではなく、行為の前、行為のなか、行為の後の連続性のなかで段階を経ることでみられるのである。地域への関与と有機的なリフレクションを関連づけた Eyler & Giles (1999) は振り返りにおいて 4 つの C として Continuous (継続した)、Connected (関連づけた)、Challenging (新たな課題を見い出して)、Contextualized (文脈に沿った) が必要条件があることを提示した。つまり、断片的に文脈に関係なく散発的なものでは十分な省察が得られないのである。

地域において新参加者が熟練していく変化の過程とそこで生成される学びを Lave & Wenger (1991) は状況的学習 (Situating Learning) とした。新参加者は当初、地域社会に部分的にしか参加できないが、周辺の参加がやがては熟達する。知識や技能が蓄積して熟練するのではなく、実践共同体への通して得られる役割の変化や過程そのものから生じているものである。

3. 地域への支援の振り返りのために作成されてきた教材の検討

本研究では地域支援に関わる教材の分析から、災害支援ボランティアの活動者やそれをコーディネートする機関やスタッフが活動の質を高めるための振り返りをどのように生み出せるか、可能性を考察していく。具体的には地域への支援に関する振り返りを目的に作成されているガイドラインや教材を収集のうえ、それらの特徴、課題、現場に即した人道支援に生かせるための教材づくりや学習環境づくりの可能性について考察する。教材の選定にあたっては「地域中心」、「支援の受け手の尊厳の尊重」という理念が貫かれており、さらに基準の提示だけでなく、地域への関わりについての振り返りを促すことを目的とするものに限定し分析を進めた。また日本における地域社会に加えて、海外の地域に関わってきた経験から作成された教材も、上記目的に合致したものは分析対象とした。分析対象とした資料と分析結果は表 1 の通りである。

分析から得られたこととして、支援や援助による地域や人々への影響について、より注意深く目を向けようとしているのは『『援助』する前に考えよう』(開発教育協会) である。ここでは慈善的な支援と参加による支援を明確に区別したうえで自分に何ができるかを考察することを促していた。ここでは省察なしに地域に関与することに警鐘を鳴らしている。参加型開発の理論をもとにして「住民参加による地域づくり」という考え方から振り返りの教材が作成されている。そのため、一方的な関わりとならないように、「支援が地域に与える影響」を振り返ることが重要なのである。そのためには、「どんな支援するか」だけでなく、「してはいけない関わり」を同時に考えることも重要となる。ワークショップで使われる教材では「支援される側」と「支援する側」の間には認識の違いがあることを

表1 教材における振り返りの視点と主な内容

名称	教材の目的	振り返りの視点と方法	主な内容	コミュニティへの関わりについての強調点	作成者
「援助」する前に考えよう	「援助する側」や「される側」の心理にまで立ち返りながら、援助や国際協力についての基本的な理解を促す。	住民が自分たちの問題を発見してその解決に向けて参加する「住民参加による地域づくりの手法」をもとに、「自分たちがこれから何ができるのか?」「何をしてはいけないのか?」をワークショップ形式で考える。	援助が現地に与える影響について考える 相手の村の人々の意見を聞くことの必要性 援助を「する側」と「される側」の認識の違い 現地で情報収集する際の課題について ボランティアを受け入れる立場から考える ボランティアを「する側」と「される側」の課題と問題点 自分たちができることは何かを考える。 してはいけない「援助」について	地域を歩きまわり、地域の特徴や課題を理解する。行動する前に地域を理解することを重視する。	開発教育協会 (2014)
リフレクションハンドブックー深い学びと出会うためにー	学習者、教師、活動先で出会う多様な人々といった異なる関係者が共通の目的に向かって活動と対話を行い、相互に影響しながら学び合い、地域社会をより良く変えていくサービス・ラーニングの視点をもとに、コミュニティベースでの活動を通じて学んでいくためのガイド。	サービス（意味ある活動）とラーニング（学び）をつなぎ、内在化していくための書き込み式のワークブック。 活動前、活動中、活動後のそれぞれの場面で、コミュニティ、私（自己）や地域における多様なステイクホルダーのアセスメント等が進められるような書き込み式のワークブック。コミュニティの現状を知り活動に関わるなかで、より良い状態を実現するための改善策を試みるアクションリサーチも提示。	私とコミュニティの関わり コミュニティへの理解 活動目標と行動計画 活動の記録をつける 活動のアセスメント 活動に関わるステイクホルダー コミュニティと人々の変容 私自身の変化 学生とコミュニティの相互作用 活動を通して得られる情報の取り扱い	地域と活動者の間のパートナーシップと互惠性を重視する。	サービス・ラーニング・ネットワーク評価研究チーム (2019)
地域への関わりを考える24の問い	問いかけを出発点にしながら、自身の地域への関わり方と行動について振り返る。	支援者が地域との関わることでどのような未来を創っていきたいか、「自分自身の考えを見つめる」「地域との関係性を考える」「未来を考える」という観点からの問いをもとに、ワークショップ形式で問いを深める。	地域への関わりとしてどのようなことを大切にしていますか 地域にはどのような声があると思いますか 「よい支援」のために、どのようなことに気をつけますか 地域にはどのようなニーズがあると思いますか 地域の人々の生き方や生活を尊重して、どのように関わりますか 被災地では目に見えづらい、どのような困難があると想像しますか 支援が届きにくい人はどのような立場や状況にあるでしょうか	地域住民と支援者が対等な関係を構築するために、対話をどのように進めるかを強調	東海大学コミュニティデザイン研究室（市川享子）と井上綾乃、太田夢香、園崎秀治、小野寺知子の共同制作（2021）
被災者支援・生活支援のためのサポーターワークブック	被災地で活動する被災者支援のためのサポーター（生活支援員）の初任者研修用テキスト	サポーターのあり方について支援者自身が考えを積み重ねていくことを重視する。地域全体の見取り図のなかで住民の状況をアセスメントし、サポーターの役割を位置づける。 演習形式で考えと実践を深められるようにしている。	サポーター活動の理念、目標、役割 被災者の暮らしの変遷、生活課題、被災者支援活動の推移 個別支援と地域支援 被災者の理解、被災者を取り巻く環境 サポーターによる支援 被災者にとっての資源 地域とつながるための支援 被災者との信頼関係の育み 被災者と地域を知る	当事者自身がどのように問題解決をしていくかを中心とし、当事者の力が発揮される支援者の関わりを示唆	東北関東大震災・共同支援ネットワーク、熊本地震・共同支援ネットワーク、サポーターワークブック編集委員会 (2016)

示唆し、両者のギャップを埋めるためには地域の声を聴くことが重要であり、地域に関わる一人ひとりが、ボランティアを受け入れる視点を持ち行動の省察することが大切であるとする。ボランティアは事前準備せずに地域に関わることは避け、地域の特徴や課題について調査も大切な要素となる。

支援者の関わりが地域にもたらす影響を自覚するためには、活動の段階に応じてさまざまな場面で振り返りを深めることが重要であり、リフレクションは支援者の成長にもつながることを示唆しているのが、「リフレクションハンドブック」(サービス・ラーニング・ネットワーク評価研究チーム)である。このハンドブックでは主に成人教育で発達してきたリフレクション理論(Toole, J. & Toole, P. 1995、など)やアクションリサーチ(Lewin, K. 1946)などを反映させながら作成されている。このハンドブックで重視されるのが、深いリフレクションを導く記録である。地域の活動において、「何が起きたか」「なぜ起こったか」「関係者は誰か」「どんな気持ちだったか」「どんな行動をとったのか」「活動が地域に与える影響としてどんなことが考えられるか」などを整理することで活動を俯瞰できる。またハンドブックでは記録の取り方、守秘義務や個人情報の保護を含めた記録の扱い方について丁寧に示されている。またアクションリサーチの視点から、活動、評価、考察という循環のプロセスにおいて、アクション(活動)とリサーチ(研究)は不可分な関係であるとする。活動に埋もれることなく、自分たちの活動は誰に／どのように影響を与えているか、もしくは影響を受けているかといった直接的／間接的な影響を考察することが示唆されている。

「問い」を出発的にして、支援者が自らの地域に関わる視点を見つめ直したり、他者との相互的な関わりから自己の相対化を促そうとするのが、「地域への関わりを考える24の問い」(市川ら、2021)であった。ここでは支援とは支援を受ける側との双方向な関係から成り立っていることに自覚を促し、地域住民と支援者がどのように対等な関係を築き、対話を進めるかが重視されている。これらは、「あなたが考える『よい支援』とはどのようなものでしょうか」のように、支援者自身の考えを深めるもの、「地域の人々の生き方や生活を尊重して、どのように関わりますか」といった地域の人々との関係を深めようとするもの、「関わりをもつ地域がこれからどのようになっていったらいいと思いますか」のような、未来を考える問いというように段階的に振り返りを進められるよう構成されている。なかでも、特徴的なのは、「支援が届きにくい人はどのような立場や状況にあるでしょうか」というように、注意深く目を向けないと見過ごされてしまいがちなことにも、注意を喚起しようとしている。

「被災者支援・生活支援のためのサポーターワークブック」は被災地で活動をする生活支援員のための研修用テキストであり、ほかの3つの教材とやや教材の性格が異なるものの、サポーターのあり方を支援者自身が考えを積み重ねていくことという特徴が参考になる。ここでは「当事者である住民がどのように問題解決をしていくか、当事者の力が発揮されるような支援者の関わり」が強調され、そのためのサポーターの理念や目標、役割について支援者自身に考えさせるような工夫がされている。そのため、地域全体の見取り図を描いたうえで、サポーターがどのような役割を担うことが必要となるか、被災者と地域の関係はどうなっているか、被災者にとって有用となる(もしくは活用が難しくなっている)資源は何かについて考えるととともに、時間の経過とともに変化する地域や人々の変

化についても目を向けるような教材となっている。

4. 災害支援ボランティアのリフレクションについての考察と提言

本研究では成人学習や地域への関与に関するリフレクション研究と地域への関与を深めるためのリフレクション教材の整理・分析から災害支援ボランティアの活動者やそれをコーディネートする機関やスタッフが活動の質を高めるための振り返りをどのように構築できるか、その可能性について探ってきた。本研究より得られた考察と今後への提言を示していく。

災害後に自助や公助だけでは復旧・復興することはしばしば困難であり、共助やボランティアの役割は重要である。学校に災害ボランティアセンター機能が設けられたり、企業の社会貢献活動として地域に出向く人々も増加し、ボランティアへの垣根が低くなり、身近なものになっている。災害に見舞われた地域での経験をもとに、地元で活動をはじめたりなど、よい影響も広がっている。ここでボランティアという一人ひとりの力がさらに生かされる活動とその振り返りの可能性について述べていきたい。

第1に被災した地域での支援は、直接「人の生活」に関わる活動ということを活動をコーディネートする側、活動者ともに、理解を深めておくが必要になる。その際に、支援者の関わりがその地域や人々にはどのような影響を与えるのかあらかじめ考えを巡らせたり、地域の自然や文化・歴史、経済の仕組み、人々のつながり方等の特徴や課題、資源について理解しておくこと、地域全体を俯瞰し、どのようなステイクホルダーが地域に関わっているか、自分たちの活動は直接的、間接的にどのような影響を与えるかについて注意深く観ていくことが重要である。これは支援者だとしても地域にとっては外部者であるという自覚をもとにした、地域への敬意を忘れないということである。

第2にリフレクションは事後に限らず、活動前、活動の最中など、活動の段階に応じて進めることが必要となる。住民を主体とした復興という理念の実現のためにも、活動がはじまる前に支援の倫理や行動基準などを明示し、それにもとづき活動者一人ひとりが考えを深めることがのぞましい。また、独りでおこなうリフレクション、グループで考えるもの、記録をもとに考えを深めていくものなど、目的に応じたさまざまな方法が確立されることも期待される。

第3に災害支援が専門家、非専門家の参加による多様なアクターによって進められているため、多職種がどのように連携しているか全体の見取り図を作成・提示したうえでボランティアの役割を明示していくことも大切となる。

第4に倫理的な支援のためには、なによりもそこに関わる人々が尊厳を尊重する意味や権利など人道的な支援について理解を深めることが重要である。スフィア条約が示すガイドラインも参考にしながら、それぞれの現場で行動指針や振り返りのあり方を考えていくことが重要である。

最後に本研究では災害ボランティアの活動者が振り返りを通して、地域に関わる意味や影響について考察し、活動への関わりをよりよく変化させていくあり方について考えてきた。振り返りが活動する一人ひとりの熟練を促すとともに、活動の質が深化し、人道的な支援の実現に向けた営みとなることを期待したい。

【引用文献】

- 合田茂広・上島安裕（2019）「被災地につなげる災害ボランティア活動ガイドブック」災害ボランティア活動ブックレット編集委員会編，全国社会福祉協議会．
- 秋元みどり・秋吉恵・市川享子・山田一隆（2019）「リフレクション ハンドブッカー深い学びと出会うために」青山学院大学サービス・ラーニング・パイロットプロジェクト．
- Boud, D., Cohen, R., & Walker, D. (1993) Using experience for learning. McGraw-Hill Education.
- CHS Alliance The Sphere Project Groupe URD (2015) “CHS Guidance Notes and Indicators” 英語版は <https://corehumanitarianstandard.org/the-standard>, 日本語版は <https://corehumanitarianstandard.org/files/files/Core-Humanitarian-Standard-Japanese.pdf>（最終閲覧2022年2月14日）．
- Eyler, J., & Giles, D.E. (1999) A practitioner’s guide to reflection in service-learning : student voices & reflections.
- 市川享子（2015）「創造的なリフレクションを支援する場の形成に関する研究：震災復興過程における学生ボランティアの関与を事例にして」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第25号，pp.92-101.
- 市川享子・井上綾乃・太田夢香・園崎秀治・山本真穂（2021）「地域への関りを考える24の問い」東海大学コミュニティデザイン（市川享子）研究室．
- JamesToole, Pamela Toole (1995) Reflection as a Tool for turning Service Experiences into Learning Experiences, Enriching the curriculum through ServiceLearning Associationfor Supervision and Curriculum Development, Kinsley,C. & McPherson, K. ed.
- 河井亨（2016）「体験の言語化」における学生の学びと成長．早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター 編．体験の言語化．成文堂．158-188.
- 河井亨（2018）「経験学習におけるリフレクション再考—『行為についてのリフレクション』と『行為の中のリフレクション』，国際ボランティア学会，ボランティア学研究 Vol.18,pp.61-pp.72.
- 久保園 梓（2015）「社会参加学習におけるリフレクションの意義と可能性：高等学校におけるカンボジア・スタディツアーを事例として」中等社会科教育研究 (34) 25-35.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation, Cambridge: Cambridge University Press. (= 1993、佐伯胖訳、『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書．
- Lewin, K. (1946). Action research and minority problems. Journal of Social Issues, 2, 34-46. (= 1954、末永俊郎訳、『社会的葛藤の解決—グループダイナミクス論文集』東京創元社.)
- Mezirow, J. 1991. Transformative dimensions of adult learning. Jossey-Bass. (= 2012. 金澤睦・三輪建二監訳．おとなの学びと変容 — 変容的学習とは何か．鳳書房.)
- ピースボート災害支援センター（2017）『災害ボランティア入門』．
- Schön , D. A. 1983. The reflective practitioner: How professionals think in action.

Basic books. (= 2007. 柳 沢昌一・三輪建二監訳．省察的实践とは何か ― プロフェッショナルの行為と思考．鳳書房.)

関嘉寛 (2016) 「東日本大震災における復興とボランティア中心一周辺の分断から考える」 関西社会学会『フォーラム現代社会学』第15号 (2016) pp.92- 105.

Sphere Association (2018) “Humanitarian Charter and Minimum Standards in Humanitarian Response” 英語版は<https://spherestandards.org/wp-content/uploads/Sphere-Handbook-2018-EN.pdf>, 日本語版は<https://jqan.info/documents/> (最終閲覧 2022年2月14日).

東北関東大震災・共同支援ネットワーク, 熊本地震共同・支援ネットワーク, サポーターズワークブック編集委員会 (2011) 「被災者支援・地域生活支援のためのサポーターズワークブック」 全国コミュニティライフサポートセンター CLC.

山下弘彦 (2021) 「被災地に寄り添う災害ボランティアセンター運営」 災害ボランティア活動ブックレット編集委員会編, 全国社会福祉協議会.

【注】

¹ SphereとはStandards Project for Humanitarian Reliefの頭文字を変形させたものであり, スフィアハンドブックとは, 「人道憲章と人道支援における最低基準」と翻訳されている。国際社会における災害や紛争の影響を受けた人々への支援に関して「尊厳ある生活を営む権利, 支援を受ける権利がある」「災害や紛争による苦痛を軽減するために, 実行可能なあらゆる手段が尽くされなくてはならない」ことが示されている。1997年人道援助を行うNGOのグループと国際赤十字・赤新月運動によって取りまとめられた。

² Core Humanitarian Standard on Quality and Accountability.